天花
TENGE

山口県立美術館ニュース

第46号

平成２年12月１日
発行山口県立美術館

長谷川三郎　星空の富士

表紙作品解説

長谷川　三　郎

1906（明治39）～1957（昭和32）

星空の富士　1934

油彩・カンヴァス　130.4×162.2㎝
第１回新時代洋画展出品

戦前の絵画史において積極的に新しい傾向が試みられたのは、未来派、構成主義などが紹介された大正後期と、広い意味での抽象美術やシュール・レアリズムが活発化した昭和一〇年代前半とである。このふたつの前衛主義は、時期が近いにもかかわらず、ほとんど別な地平から出発しているように思われ、それらの運動を担った作家たちも重なることがないのは興味深いが、長谷川三郎は後者に属し、新時代洋画展から自由美術家協会結成へと参画していく過程で主導的な立場を貫いた作家であった。ごく初期には野獣派的な奔放さを示し、やがて具体的な形象を残しながら構成的な作品に移り、晩年（戦後）は純粋な抽象へと辿りついたその足跡には、したがって後者の前衛傾向の典型的な一側面を見てとることができるかもしれない。

明治三九（一九〇六）年生まれの長谷川が自己を確立しようとする十代後半はちょうど大正後期にあたり、前記の前衛傾向が花開いたように、比較的自由な時代の雰囲気と恵まれた家庭環境のなかで美術との出会いがあったことは想像に難くない。大学では美術史を修め、卒業後にアメリカ経由でヨーロッパに遊学し、帰国後に帯欧作が二科会に特別陳列されたというと、いかにも画家として華々しいスタートであったイメージだが、すべてを時代状況のせいと考えるわけにはいかないとしても、そこにはひとつの幸運が読みとれるだろう。

この作品は、彼が独立美術協会に誘われたものの、会員との考え方の違いから結局は同会に参加せず、新時代洋画展を組織（昭和九）した頃の作品である。むしろこの頃から自由美術家協会設立（昭和一二）までが、長谷川が本格的に画家としての立場を固めていった時期であろう。

画面に見える奔放な筆遣い――。中央やや右よりのところに頭を出した富士山は、写実的ではなく、伝統的に観念化された富士山であり、装飾的な銀色の稜線をもつ。紫色や緑色の雲間に拡がる夜天には、小石ほどの大きさもある幾多の星が瞬いている。全体の色調は抑えられているものの、色面を形づくる筆やナイフの動きが、夜空を見上げた時に感じたであろう宇宙のエネルギーを表わすかのように、画面中を飛びまわっている。とはいえ、線がウネウネと全体を覆っていれば空間にそうした運動感がもたらされるというわけではない。ここでの各部分の色彩と線の働きは、部分部分に表情の変化を与えながらも全体をむしろ均一な緊張感で統一するものであり、いいかえれば、奔放な筆触によって形成された各部分の質は、その表情ほどには差が大きくないので、私たちの視線が自由に画面上を滑っていくことが可能となるような、浅い奥行きの、左右へ拡散する動きが、そうした要素によってもたらされているのである。それはまた、この作品が、油彩画独特の厚塗りによって絵具の素材感を強めているにもかかわらず、むしろ壁掛け（タペストリー）のような装飾性を示していることともかかわりがある。同時期の「鳥」（昭和七）や「青の静物」（昭和九）などの静物画には、モチーフのバックに装飾的効果と個性的な感覚とをあわせもったパターンが明確に表わされており、ここではそれが奥行きを示すはずの星空であるという違いがあるが、ごく初期の作品のほとんど恣意的な筆致を構成的に使っているという意味では、この頃にひとつの方向性が自覚されたと考えられるであろう。ある種の叙情性をたたえながらも造形的な意識をもつこと。日本的なフォーヴィズムの拠点となった独立美術協会に参加しなかった理由も、そうした点に求められるだろう。

（高田美規雄学芸主任）

展覧会特集

大英博物館 芸術と人間展

The Treasures of the British Museum

大英博物館

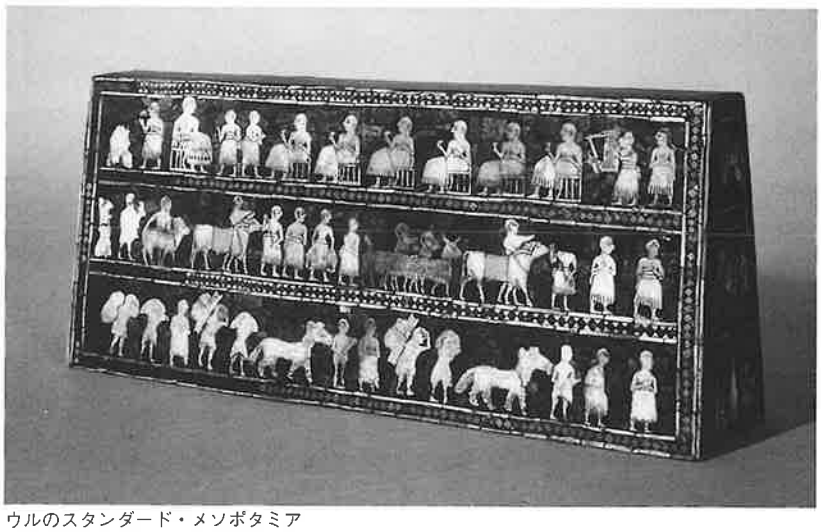
今年、大英博物館において興味深い展覧会が開かれた。「フェイク？欺きの美術展」と題されたこの展覧会は、いわゆる偽物を約六〇〇点も展示した。「偽物展」、美術館員にとっても興味あるテーマであるが、実行できる館はきわめて少ないだろう。大英博物館の担当がインタビューに答えて（「芸術新潮」一九九〇年七月号）「大英博物館も間違いを公開するわけだから、他の博物館も参加しやすかったとは思う。」と述べているのは、大英博物館の位置といったものをよく示しているように思われる。さらに、このアイディアが理事会から出てきたとも言っている。このことも大英博物館の運営についての情報として興味ぶかい。

大英博物館は、サー・ハンス・スローンのコレクションを受けいれることから始まった。スローンは、アイルランド生まれの内科医で、若い時から博物館に興味をもち、自然史の標本や古代遺物、書籍などを積極的に収集した。そのコレクションはヨーロッパ中に知られ、多くの人がそれを見るために訪れたという。英国学士院会長をもつとめたスローンは自分の死後、コレクションが散逸するのをおそれ、国家に提供することにした。議会の法案は、一七五三年国王の承認を得た。それにもとづいて理事会が設置されたのである。大英博物館のこの設立の経過は注目する必要がある。議会による法律の制定と理事会の設立は、公的運営のモデルケースとして、もっとも早いもののひとつであろう。入場無料をはじめとする公共性、公開性の高さもここからきているのである。

スローンのコレクションにとどまらず、博物館は、多くのコレクションを受けいれた。王室をはじめ貴族や大コレクターなどから積極的にそのコレクションを入手している。さらに注目すべきは発掘調査とのかかわりである。メソポタミアやエジプトをはじめとする世界各地での調査は、多くの知見をもたらしたが、また、その成果の一部は大英博物館におさめられている。

こうして、コレクションは増大していったが、それにともなって建物が手ぜまになった。一八二三年、サー・ロバート・スマークによって設計された新館は、完成まで約三〇年を要するが、これが現在も建物の中核をなしている。一八八〇年代には自然史部門が他に移転した（現在の

自然史博物館)。二〇世紀に入るとさらに拡大は進んだ。一九〇六年エドワードⅦ世によって礎石が置かれた建物は、一四年に完成、オープンした。今年この建物の中に新たに日本ギャラリーがもうけられたが、この開設への日本からの協力が、本展覧会開催のきっかけでもある。



ウルのスタンダード・メソポタミア

一九七三年、大英図書館が設立されると、大英博物館の中枢を占めていた図書部門がそこにとりこまれることになった。図書は二段階にわけて新しい建物に移転される。この作業は一九九六年までには終了する予定である。これによって大英博物館は大きな展示スペースを得ることになる。おそらく一〇年を待たず、われわれはより充実した大英博物館を見ることになるだろう。

アッシュルナシルパルⅡ世のライオン狩りのレリーフ・メソポタミア

本展覧会の内容

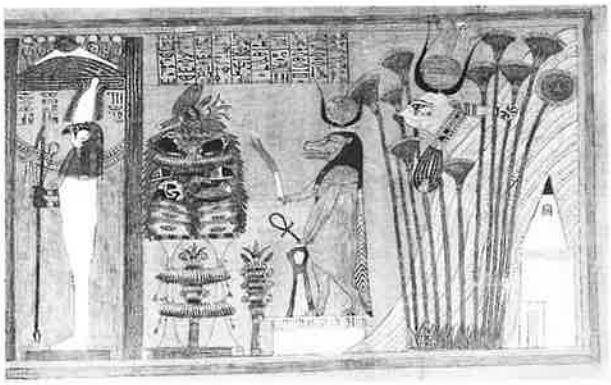
大英博物館の七〇〇万点をこえる膨大なコレクションは、人類の生きたあらゆる地域と時代の文明を余すところなく知らせてくれる。まさに人類の創造の歴史そのものである。この展覧会では最も充実した内容を誇る同館の五つの部から、世界の七つの地域の文明の遺品を紹介する。

西アジア部からメソポタミア。エジプト部から古代エジプト。ギリシャ・ローマ部から古代ギリシャ。東洋部からインドとシルクロード。民族学部からマヤ・アステカとポリネシアのハワイ諸島など。この七つの文明のさまざまなジャンルの代表的な遺品三〇~五〇点程度を選りすぐった総計二五〇余点で、それぞれの文明のエッセンスを十分に堪能できる内容となっている。

これらは歴史的、造形的にかけがえのないものばかりで、大英博物館の神髄を示す名品ぞろいである。門外不出の品で初めて館外にでるものが多く、同館で展示していないものさえある。以下、七つの文明とその遺品について簡単に述べ、本展覧会の内容の一端に触れていただこう。

メソポタミア　都市文明の誕生

現在のイラクを流れ、ペルシャ湾にそそぐティグリス川とユーフラテス川。そのあいだにはさまれた肥沃な土地メソポタミア(ギリシャ語で「二つの川の間」の意)に文明が誕生したのは、紀元前六〇〇〇年代の



アニのパピルス・エジプト

ラムセスⅡ世胸像・エジプト

ことであった。メソポタミア文明は、麦を耕作し、土器をつくった北のアッシリア地方に始まった。やがて紀元前三〇〇〇年代には、南のバビロニア地方にシュメール人による灌漑農耕と商業が発達して都市が成立し、楔形文字が使用された。

紀元前二〇〇〇年代のバビロニア地方の都市国家ウルの王墓から発掘された副葬品は、本展のみどころのひとつである。なかでもラピスラズリや骨などを用いたモザイク画で戦争と平和を描いた「ウルのスタンダード」は、その用途は不明ながら、シュメール人の生活を表現した代表的な遺例として知られている。

アッカド王朝がおこった後メソポタミアは混乱期にはいり、バビロン王朝の支配、ヒッタイトの侵入などを経て、北のアッシリア人による大帝国が建設されるにいたる。バビロニア地方を併合し、紀元前一〇〇〇年ころにはエジプトにまで勢力をのばしたアッシリアは、かれらに固有の美術を生んだ。ニムルドの宮殿から発掘された「アッシュルナシルパルⅡ世のライオン狩りのレリーフ」は軍事的な場面の描写にもっとも優れていたアッシリア美術の最高傑作であり、微妙なモデリングと克明な細部表現による見事な作品である。

エジプト　神と王家の人々

ナイル川の定期的な氾濫によって流域は大きな生産力を与えられ、これを背景に紀元前四〇〇〇年代には灌漑農耕の文明が成立した。紀元前三一〇〇年ころにはエジプト全土を統一するファラオ（王）があらわれ、紀元前三三二年、アレクサンドロス大王によってエジプトが征服されるまでの約三〇〇〇年間に、三〇の王朝が交替する。エジプトには統一王朝成立以前、すでに高度な造形活動があったが、三〇〇〇年間に大きな様式的変化のなかったエジプト美術の基礎は、王権が確立することによって固まったといえる。それは神と同体である王に奉仕し、来世の生を期待する宗教的な意味が、常にエジプト美術の主要な性格であり続けたからである。

本展にはエジプト文明の最初の隆盛期である紀元前二八〇〇年ころの古王国時代、その後の隆盛期である中王国、新王国時代の王や高官や神の彫像十数点が出品されており、この部門のみどころとなっている。このなかには新王国時代の有名なファラオ「ラムセスⅡ世の胸像」など、第一級の洗練された様式美を備えた作品がふくまれている。

彫刻以外では王墓などの副葬品に注目すべきものが多い。当時の生活をあらわした木彫の小像群、貴金属、宝石、ガラスなどをもちいた豪華な装身具類は、人々の美意識を今に伝える。固有の宗教にもとづく死生観を表現した著名な「アニのパピルス」をはじめとする数点の死者の書は、象徴的な表現によって独特の絵画的世界を展開しており興味深い。

ギリシャ　西洋文明の源流

エーゲ海沿岸のバルカン半島や小アジア半島に、紀元前一一〇〇年ころギリシャ民族のドーリア人が南下して先住民を征服し、クレタ文明の影響を脱した純粋なギリシャ文明が

成立する。ギリシャ美術はエジプトや西アジアなどの影響をうけながら、単純な文様を中心とした様式から自然主義的な様式へと変化していった。紀元前七～六世紀ころのアルカイック様式の時代には、図式的な表現ながら等身大の人体像がつくられるようになり、続く二〇〇年間には、パルテノン神殿の彫刻に代表される理想の人体美と精神性を追求したクラシック様式が成立する。このクラシック様式は後に西洋美術の規範として受け継がれていくことになる。クラシック期を過ぎると世俗的な趣があらわれ、各地に広がる植民地の文化と融合してヘレニズム様式の時代となる。

この部門には二つの大きなみどころがある。ひとつはアルカイック期からヘレニズム期までの大理石やブロンズの彫像の変遷。もうひとつはギリシャ美術に重要な位置を占める幾何学文期からクラシック期にいたる壺絵の発展である。彫像は「ストラングフォードのアポロン」の名で知られるアルカイックからクラシックへの過渡期的な作風を示す青年像をはじめ、タラスやスパルタのブロンズの小像、ヘレニズム期の文学的主題のレリーフなどヴァラエティに富んでいる。壺絵は幾何学文にはじまり、アテナイ最大の壺絵画家エクセキアスのアンフォラをはじめとする黒像式のもの、それに続く赤像式のもの、さらに白地のものが合わせて十数点出品されている。

ストラングフォードのアポロン・ギリシャ

黄金製舎利容器・インド

エクセキアスの黒像式アンフォラ・ギリシャ

インド　信仰と風俗

インド美術は、紀元前二三〇〇～一八〇〇年頃に栄えたインダス文明に始まる。インダス文明滅亡後、インドに定住したインド・アーリア人は、インド・ヨーロッパ語族に属し、その文化様相は、ヴェーダと呼ばれる聖典からうかがうことができる。このヴェーダに示された宗教・神話が、後世のインド文化の大きな源泉となっている。

インドにおける本格的な美術活動は、仏教が成立し、発展する過程で始まったといっていい。釈迦の遺骨（舎利）を納めたストゥーパ（仏塔）の造立に始まり、仏像の出現と、そのさまざまな展開は、インド美術に豊かで華やかな拡がりと厚みを付け加えたといえるだろう。この部門では、仏教美術としてのこうした種々の仏像の変遷の様子を紹介するほか、ジャイナ教、ヒンドゥー教といった仏教以外の宗教のさまざまな神々の姿を形どった石像や青銅像も同時に展示する。またインドでは、イスラムの侵入によってもたらされたペルシャの細密画（ミニアチュール）の影響のもと、インド独自の特色をもった細密画が発達した。ここでは宮廷風俗や肖像、花鳥などを描いたムガール絵画、さらに神話や伝統的な物語を描くラージプト絵画など、一六世紀以降、インドに花ひらいた華麗な細密画の世界を幅広く紹介する。

この部門の展示品のなかでもとくに、アフガニスタンのビーマラーン遺跡の仏塔から発見された「黄金製舎利容器」は、インド仏教美術史を語る上では、欠かすことのできない

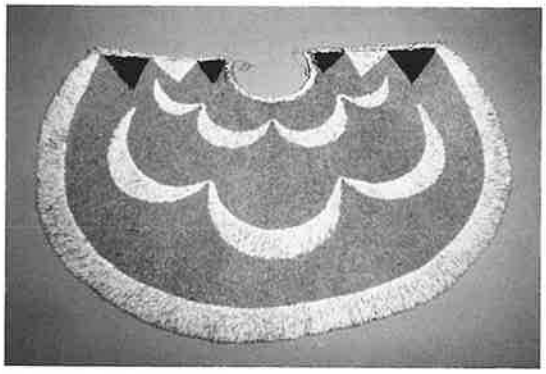
引路菩薩図・西域

アマラーヴァティー大塔図浮彫・インド

板絵養蚕西漸伝説図・西域

ヤシュチラン第16号リンテル・メソアメリカ

シペ・トテックの面・メソアメリカ



羽毛製ケープ・ポリネシア

名品であるといえよう。また南インドの「アマラーヴァティー出土の大塔図浮彫」は、大英博物館においても、保存上の問題から、普段見ることのできない貴重な作品である。

西域　スタイン・コレクション

ここでいう西域とは、中国の西方という意味で、シルクロードの中の敦煌から西に広がる地域をさしている。西域に伝播した文化は、言語や風習の異なる各都市国家に、さまざまな形で定着したため、その内容はきわめて多様性に富んでいる。

今回この部門で展示される作品は、すべてイギリスの考古学者サー・オーレル・スタインの収集品であり、このコレクション自体が、そうした西域美術の多様性を如実に示す内容となっている。彼は、いわゆる西域南道、北道周辺の諸遺跡、および河西回廊の敦煌などで発掘調査をおこない、貴重な文物を持ち帰った。

とくにこのたびは、敦煌の千仏洞（莫高窟）からもたらされた一八点の仏画類が出品されていて、なかには「引路菩薩図」のように、図像的にきわめて珍しい仏画も含まれている。また、中国から西域へ養蚕が伝えられた説話を絵画化したダンダン・ウィリク将来の「板絵養蚕西漸伝説図」など、大変興味深い作品も数多く出品されている。

メソアメリカ　マヤ・アステカ文明

メソアメリカは、南北両アメリカ大陸を結ぶ大地峡地帯に生起した古代文明の総称である。紀元前から九世紀にかけてユカタン半島を中心に栄えたマヤ文明は、大規模な神殿建築、特異な絵文字、高度な天文学知識に基づく正確な暦をつくりだすなど、独特の文化を創りあげると同時に、個性豊かな芸術も開花させた。そのマヤにかわり、一〇世紀以降メキシコ中央高原で、軍事国家を築いたのが、アステカ文明である。

このふたつの文明は、いずれも複雑な神々の体系と、独特な宇宙観・世界観をもち、血なまぐさい慣習と儀式に彩られた文明であった。たとえば、マヤ中部のヤシュチランの遺跡を飾る「リンテル」（楣石）には、それら血の儀式や、戦いを象徴する場面が刻まれている。ここにみられるように、マヤ・アステカの両文明とも、金属をほとんど用いない、特異な〈石の文化〉であったといえる。

ポリネシア

ハワイ王国とキャプテンクック

ハワイ諸島やタヒチ島などの南太平洋の多くの島々を含みこむポリネシア文化圏。ここにも、これまで見てきた西洋文明とは全く別系統の文明が生みだされたのであった。西洋での富や権威の象徴である金・銀などの貴金属が全く無視され、羽毛やひすいなどがそれらにかわって珍重されたのであった。

この部門の展示品のなかには、ハワイ王国のカメハメハⅡ世大王とカママル王妃から、イギリス国王ジョージⅣ世にプレゼントされた羽毛製のケープなどが含まれている。しかし、なんといっても、このコーナーの中心は、名高い航海王キャプテン・クックのコレクションであり、彼がその航海の途上で収集した羽毛製品、ひすい工芸品、細緻な細工のほどこされた木彫、象牙作品などは、質量ともにみごとなものである。

会　期　1月5日(土)～2月20日(水)
休館日　月曜日（ただし2月11日(月)開館、2月12日(火)休館）
入館料　一般　一一〇〇円（九五〇／八〇〇）
　　高大生　八〇〇円（六五〇／四〇〇）
　　小中生　四〇〇円（二五〇／二〇〇）
（　）内は前売り／団体（20名以上）料金

ナンシー走るの記

安井雄一郎

ようやくにして海外研修の機会を得ることができた。とはいえ期間は長くない。それになしたい課題はなすべき課題ともども多い。いきおい走りながら考え、考えながら走るという出張だった。そのなかでも多少は余裕をもって関係者と接し得たのは、ナンシーでの数日だった。

ロレーヌ地方の首都ナンシーは前世紀末から今世紀はじめにかけて花ひらいたフランス・アール・ヌーヴォをパリと二分し、特に植物モチーフで独自な展開をみせた都市だが、それを推し進めたナンシー派の作家やそのリーダーだったガラス作家エミール・ガレは、S・T・マドセンの指摘いらい、当時、同市に留学していた山口県出身の高島得三（号北海）から日本美術の技法、発想をまなびとったとされている。とはいうものの、その実態はいぜんとして明らかでない。

ナンシーのタカシマを検証したものでは、アール・ヌーヴォ再評価の機運をうけて書かれたナンシー派美術館の前館長テーレーズ・シャルパンティエ女史の論文が唯一のものだが、同論は、当時の雑誌記事などでタカシマの事跡を追いながら、この都市でのアール・ヌーヴォ開花直前の美術活動と彼の関わり、その意義について検討しながらも、いざタカシマの個々の作家との具体的交流となると記述がぐっと少なくなる。特にガレとタカシマとの関わりの論述は余りにも少ない。

と思うのも日本画や東洋画論に通じた高島が農商務省の林業技師としてナンシーの国立森林学校に留学した一八八五年から八八年にかけては、ガレはすでに二代目事業家としてナンシーの知名士であり、また自らの創作関心に根ざして熱心な日本美術の愛好家でもあった。

それに二人をつなぐ接点はナンシーの美術愛好協会や中央園芸協会等いくつもその場が想定されるのである。にもかかわらず、同論でこの問題がそれほど重視されていないのは、比較検証すべき具体的素材が少ないというのが最大の原因なのだろうが、ナンシーでの関係者は、タカシマについてどんな考えをもっているのか、そんなことから交流のきっかけができれば、という思いがあった。

そして到着の翌日からナンシーでの短かな滞留がはじまった。

すでにナンシー在住の主婦、田賀さんに通訳等をお願いし、行先は館から協力の文書依頼をなしていた。多忙でアポのとりつけが難しい所は、とりあえず当館のカタログ一セットと名刺とメッセージをカウンターの職員に託し、滞留中、調整がつきしだい訪ねることにして、まず狙いをつけたナンシー植物園を訪ねることにした。こちらは田賀さんの調整ですぐにでも面会オーケーだった。

ナンシー大学の敷地内にある同植物園は、歴代、中央園芸協会の事務局がおかれてきた。「花への愛情はガレ家の遺伝的な情熱だった」と自ら書いたガレは一八七七年いらい同協会の理事長をつとめ、協会機関誌の編集にあたっている。本草家の家に生まれ、東洋の植物に詳しい高島もこの協会に関係していた。考えられるふたりの接点として最も可能性が高く、その割りには着目されていない場所である。

対応していただいた園長ピェル・ヴァルック氏は伝統をほこる同協会の現副会長でもある関係で、その歴史にも詳しい。主に二つのことをお尋ねした。①ガレと北海との接点はナンシー中央園芸協会と考えられるが、その出会いの時期や記録の有無について ②ナンシー中央園芸協会とガレの関係について。以下はその答えの要約で、氏の言葉にはガレへの熱い思い入れが感じられた。

①記録はないが、同協会での二人の出会いの時期は高島がナンシーに着いてまもなくのことだと思う。②当時ナンシーは園芸では世界的に知られていた。国境の町で経済的にも繁栄しており有名な園芸家が住んでいたせいでもある。クルスはベゴニアの専門家。ヴィクトル・ルモワーヌはなんでもやった。高島がいたころはシモン・ルイスが会長。ヴィクトル・ルモワーヌが副会長。高島は二人を知っている。ガレの植物コレクションは実に素晴らしいもので、農林省から勲章をもらうほどの価値をもっていた。ガレの庭には特に日本の植物も植えられ、園芸家のどの庭園よりもきれいに手入れがなされていたらしい。協会の機関誌はほとんどガレがすべて書いたようなもの。死後出版された『芸術のための覚え

園長室で、左がヴァルック氏、右は夫人

書き』Ecrit pour l' Art は最近再版がマルセーユから出たが、現在売りきれてない。

氏は今回のことで高島関係の新資料を当時の「園芸協会誌」からコピーされ用意されていた。まだまだ未知の事実が出てくる可能性のある同協会誌の閲覧にも快く諒解をいただいたが、時間の関係でついに果せなかった。最後に館あての土産を渡され、同植物園で六日からはじまる『ガレと植物の世界』展のレセプションに招待をうけた。

つぎに訪ねたのは、ナンシー市文化課だった。市の象徴でもあるスタニスラス広場の一隅にあるオフィスで外交広報担当のミシェル・ムーヴージュ夫人に郷土出身のゴンクール兄弟の話しなどをうかがったが、ここからそれまで調整がつかなかったナンシー派美術館のバルビェさん、森林学校図書館のリオネさんに連絡、確認とアポをとりつけてくださったのは収穫だった。皆さんヴァカンスや行事をひかえて多忙の由。ここでも館あての土産を渡された。

国立ナンシー森林学校図書館では司書のリオネさんに留学時の高島、また当時の森林学校について聞いた。

当時フランスには二つの森林学校があった。ナンシーの森林学校の方は森林管理職（技師）を養成するのに対して、もうひとつは森林関係の各パートを担当する技術者を養成するもので、ナンシーの方が程度が高かった。また大学や専門学校を卒業して入学してくるので就学年齢も高く、また東欧、イギリス、中国などからも学生をとっていたのでインターナショナルな雰囲気もあったし、市内の子女との恋愛事件も多々あったようだ。高島はエジンバラの万国博に武井守正の随行員として来たが、留学先をナンシーに決めたのはエジンバラにいた時だろう。当時は普仏戦争直後でドイツとは政治的には緊張関係がつづいていたが、研究者の情報交換は密なものがあり、高島は就学直後は慣れないフランス語のため講義についていけない状態で、絵がうまいので、ドイツ人学者による木の病気に関する著書のフランス語訳をしていた教授のアシスタントとしてその挿絵を描いた。かなりの量の資料を描いたが、実際にはその一部が訳書に掲載された。それらの挿絵原稿は、その後、軸装して講義のとき使われた（現存）。また高島が、日本の「大日本森林報告」誌に発表した報告書は、語学等で彼がまだ正規の授業についていくのが無理だったことから視察に出そうということで出したときの記録。彼が留学中どこに住んでいたのかは不明だが、恐らく最初は学校の寮に寄宿したのち市内のどこかに移り、そこから通学したのだろう。学校は一部増改築した箇所があるが、当時の状態を多く残している。

それまで何度かでかけたナンシー派美術館はガレやナンシー派のパトロンだった実業家ユージーヌ・コルバンの邸宅を美術館にしたものだが、敷地や館もふくめてアール・ヌーヴォ・ナンシー派美術の要約といっていいほどまさにアール・ヌーヴォー一色で統一された美術館で行くたびに興味が深まったが、ここではナンシー最後の日にジョルジュ・バルビェ氏とほんの少し面談できたのはムーヴージュ夫人の先日の配慮がきいたものだろう。同館所蔵のガレの代表作『フランスのバラ』が盗難にあい持主が日本人と判明して国レベルで返還要請をやっているがはかばかしくない。そのためフランスの美術館関係者は日本にいい感情をもっていないとの氏の話しはシャルパンティエ前館長の日本人嫌いの風説と重なり、うっとうしい思いにさせられたものの、ガーナーのガレ評伝の感想を聞いたとき、前館長のガレ論はフランス人にすら難解な文章だが、ガーナー氏の本はテクニックの解説も判りやすくガレ理解にはいい本だと思う、と先任者との大胆な比較の上でかなり直截なこたえが返ってきたのには少々驚かされた。

ヴァルック氏に招待をうけたレセプションはナンシー最後の日の夕刻にひらかれた。このレセプションには予期しない収穫があった。展示された写真や関係資料でこれまで見たこともなかった記録に出くわしたし、

「ガレと植物の世界」展示場風景

展覧会の展示パネル

展覧会の展示資料「ガレのイタリア・スイス旅行記(1877年)」

ガレが愛好したモチーフ、ロンブル。人の背丈以上に成長する。

ガラス作品などに陰刻されたガレ独特のあのふるえるような繊細な文字がいわゆる意図的に作られたものだったことなどが判った。またヴァルックさんがいろんな人に紹介してくださった。ナンシー大学長ミシェル・ブーランジェ氏、これまで調整がとれなかった市立美術館のクロード・ペトリさん、ナンシー派作家の末裔のおばあさんほか。

なかでもジャン・ペルトイさんは通訳を介しての議論が印象的だった。同氏は予防医学センター薬物部長職にある医師だが、ガレの蘭のモチーフに関する本の著者でもある。ガレは植物を介して今日のような日本人との出会いも作ってくれた。おかえしに色んな場所でガレの人となりを紹介していかなければならない。あなたは日本でガレを大いに紹介してほしいとは面映ゆく拝聴したが、ガレは自然を介して日本を知った。ガレの自然観には日本人の自然観に通じるものがある。つきつめれば禅のような自然観と思う。ガレを自然に向けたのはプロテスタンティズムだろう。―その言葉が理解しにくかったので説明を求めると、プロテスタンティズムは世界を理解させるのに比喩や寓意をよく使う。自然を擬人化するガレの資質傾向は幼少期の宗教生活によるものと思うとのこと。半可通の議論だったが、そのなかでガレ芸術の秘教主義との関係を尋ねたときのギクッとした氏の表情が謎めいていて興味を覚えた。フィリップ・ガーナーのガレ評伝でも、彼の芸術と宗教との関わりについてはきわめて微妙な論述がみられる。最後にヴァルックさんに招待のお礼を言って辞去。氏はパーティに日本人がきてくれ一段と花を添えてくれた、昔の高島のようなことをしてくれたと逆にお礼を言われたのは社交辞令とはいえ二度めの面映ゆい経験だった。

ナンシーではそのほかにガレやナンシー派の作家の旧宅など捜し歩いたり、市内のアール・ヌーヴォ建築やドームのガラス工場を見学したほか、郊外では田賀さんの車でバカラ社のガラス美術館、ロレーヌ大公の住んだリュルネヴィル城、かつて軟質陶器の生産で栄えたサン・クレモンなどを訪ねた。毎日が駆け足ですぎ、多く見、多く聞いたことの整理もそこそこにつぎの用務地にと向かった。

（当館普及課主任）

美術館から

〈3月までの展覧会〉

山口大学卒業制作展 2／28～3／3

山口芸術短期大学卒業制作展 2／28～3／3

ペルー黄金博物館展 3／7～4／7

〈県美展〉

第四四回山口県美術展覧会をつぎのような日程で開催しました。

会　期　10／9(火)～10／25(木)

実　績　表1のとおり

入賞者　（大賞・優秀賞受賞者のみ）

大賞（三〇万円・一本）

河村成次

『燃え土木(つぎた)』（立体部門）

優秀賞（五万円・七本）

小田善郎

『夜』（平面部門）

吉川幸昭

『Fish』（平面部門）

豊田光子

『青の空気』（平面部門）

荒田泰邦

『星の流れと阿蘇・火映』（平面部門）

上野百合夫

『8月13日木曜日晴』（平面部門）

時重文生

『安身為楽』（平面部門）

森野清和

『時空間漂流（種の消滅・過去の教訓・卵生神話）』（立体部門）

表1　第44回県美展実績

部　門	平面部門	立体部門	総　計
出品点数	717 (712)	181 (169)	898 (881)
入選点数	132 (127)	33 (31)	165 (158)
入賞点数	17 (21)	5 (6)	22 (27)
展示合計	149 (148)	38 (37)	187 (185)
展示率(%)	20.8 (20.8)	21.0 (21.9)	20.8 (21.0)
出品者数	481 (463)	107 (98)	588 (561)
入選・入賞者合計	143 (146)	36 (36)	179 (182)

（　）の数は前年度数

〈移動美術館〉

山口県立美術館移動美術館をつぎの日程で開催しました。

第一会場

山陽町（青年の家体育館）

10／25(木)～10／29(月)

入館者　一五五三人

第二会場

久賀町（町民センター）

11／1(木)～11／7(水)

入館者　一四九四人

〈シベリア・シリーズ展〉

平成元年九月から全国六つの美術館・朝日新聞社・山口県立美術館の共催で開催した『マイナス三五度の黙示録―香月泰男〈シベリア・シリーズ〉』展が閉会しました。この間、七八二七六名の方がたに見ていただいたことになります。入館者の方がたはじめ各主催館ならびに関係各位に厚くお礼を申しあげます。

長野県　日本民俗資料館　平成元・9／30～10／29

熊本県　熊本県立美術館　平成2・1／5～2／4

埼玉県　埼玉県立近代美術館　2／10～3／28

福岡県　福岡県立美術館　4／10～5／6

愛媛県　愛媛県立美術館　5／12～6／10

宮崎県　都城市立美術館　10／19～11／11

常設展案内

［第一常設展示室］

●絵画展示室（香月泰男室）

シベリア・シリーズ(Ⅱ)2／28～

●絵画展示室（小林和作室）

松田正平展　2／28～

●郷土工芸室

萩の茶陶　2／28～

●資料展示室

田村彰英の写真　2／28～

［第二常設展示室］

植木茂の彫刻　3／5～

＊休室のお知らせ

第一・第二両常設展示室は、特別展『大英博物館展』の会場使用のため12月10日(月)から平成3年2月27日(水)まで休室します。

また、第二常設展示室についてはひきつづき開催される山口大・山口芸術短大の卒業制作展会場使用のため2月28日(木)から3月4日(月)まで休室します。

山口県立美術館ニュース「天花」　第四六号
平成二年一二月一日発行
発行　山口県立美術館
〒753 山口市亀山町三―一
☎〇八三五―二五―七七八八
FAX〇八三五―二五―七七九〇
印刷　瞬報社写真印刷株式会社